

異聖歌の足跡を辿る

【おいたち】

異聖歌（本名：野村七蔵）は、明治38年2月12日、岩手県紫波郡日詰町（現・紫波町）に7人兄弟の末っ子として生まれました。14歳の時に知人の家で『赤い鳥』を見て童謡に興味を持った聖歌は、「異聖歌」として始めて投稿した「水口」で北原白秋にその才能を評価されたことをきっかけに、素晴らしい作品を世に残していく文学者として歩みはじめました。

【童謡「たきび」の誕生】

童謡「たきび」は昭和16年、JOAK（現・NHK）のラジオ番組の依頼を受け、当時住んでいた東京都中野区上高田の風景をもとに作られました。

しかし、「たきび」の放送は太平洋戦争の影響で早々に打ち切れ、また、「たきびは攻撃目標になる」などの理由から、その後の放送もできなくなってしまいました。

戦後は教科書に取り上げられましたが、今度は消防署から子どもだけの「たきび」は危険だとの指摘を受けて、付き添いの大人と水の入ったバケツの絵を添えるというアイデアでこれを凌いだことは有名です。

【日野へ】

昭和23年10月、知人の仲介で疎開先の岩手県から日野町東大助（現・日野市旭が丘）に転居します。市内や多摩地域の学校の教師とも親交があり、綴り方や児童詩の指導も精力的に行いました。

また、校歌の作詩も多く手がけ、日野市内でも七生中学校や日野第四小学校の校歌を作詩しました。

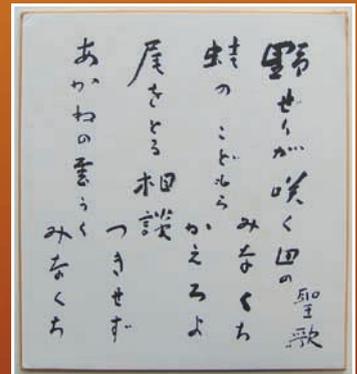
聖歌は昭和48年に68歳で亡くなり、平成10年に異聖歌が住んでいた家を取り壊されることになりましたが、地元みなさんが聖歌の仕事をいつまでも語り継いでいくため、「たきび会」をつくりました。現在は日野市郷土資料館に多くの貴重な資料が収蔵されています。

【現在のイベント紹介】

地元の旭が丘商工連合会が主催となり、平成18年より詩碑がある旭が丘中央公園で12月に「たきび祭」を行っています。また、異聖歌の誕生日である2月12日頃には、日野の自然を守る会が主催となり、「特別行事 たきび」を行っています。



旭が丘商工連合会による「たきび祭」
(旭が丘中央公園)



異聖歌自筆の代表作「水口」の色紙



童謡「たきび」の舞台となった鈴木家
(平成17年中野区にて撮影)



日野市の旧異聖歌宅



異聖歌夫妻と山羊(旧日野市自宅にて)

